

視線・まなざし

私たちの身体には、近過去からはるか古代の記憶までが内在しているのではないか。文化とは身体の記憶であり、現在の形象とは、私たちの身体の記憶の浸潤に過ぎないのではないか。身体と文化シリーズは、身体を多方面から解体することにより、記憶の痕跡を探り現在の文化に与えてきたものを再認識する。

2014年4月26日(土)

17時—20時(開場:16時45分)

入場無料

(16時30分より整理券を発行します)

東京大学駒場キャンパス

21KOMCEE 101室

東京都目黒区駒場3-8-1

磨 赤児 舞踏家・俳優

橋口讓二 写真家

小林康夫 東京大学教授

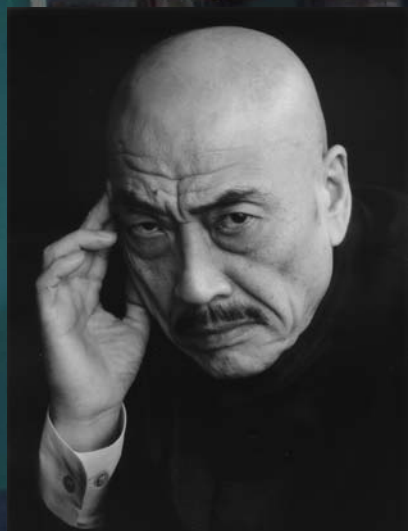


写真 白鳥真太郎



写真 三浦雅弘

磨 赤児 (まる・あかじ)

1943年、石川県生まれ、奈良県育ち。'64年舞踏家、土方巽に師事。唐十郎とともに劇団状況劇場設立に参画。演劇界に多大な影響を及ぼす。'72年大駱駝艦を旗揚げ、舞踏にスペクタクル性の強い手法を導入し、日本だけでなく海外でも高く評価され BUTOH が世界に浸透する切っ掛けを作る。ダンサー、役者、演出家として現在まで舞台芸術の分野で先駆的な地位を確立している。1974年、'87年、'96年、'99年、'08年舞踊評論家協会賞受賞。'06年文化庁長官表彰受賞。

橋口讓二 (はしぐち・じょうじ)

1949年、鹿児島県生まれ。日本各地を放浪の後、写真家となる。'81年、路上に集まる若者をとらえた「視線」でデビュー。人間の存在を見つめるドキュメントを発表し続ける。'88年より日本で生きる人々のポートレートを撮り、その言葉を記録するという作業を現在まで続けている。また'00年よりワークショップやポートレート写真と朗読を合わせた「スチルムービー」を国内外で行う。'81年第18回太陽賞、'92年平成4年度日本写真協会賞年度賞、第8回東川賞国内作家賞。

—1960年代、'70年代、'80年代の〈まなざし〉は明らかに現代とは異なっていたのではないか。安保闘争を経て、'70年代の自由を希求する若者たちのまなざし、'80年代の街にたむろする少年・少女たちの不安と不信に満ちたまなざし。現在のスマホやゲーム機に俯く若者たちとは、異なった視線で何ものかを見つめていたのではないだろうか。

70年代のまなざしについて講演していただく磨赤児氏は、'60年代の状況劇場を経て、土方巽・大野一雄・笠井勲らとともに舞踏の世界を通して、'70年代の身体とそれを取り巻く状況を見つめつづけてきた。'80年代は、'81年に街にたむろする少年少女たちに真正面から向き合った写真「視線」で高い評価を得て、現在まで街や人々を見つめ続ける橋口讓二氏にお願いする。

第二部のトークセッションでは、小林康夫教授を含めた三名で、'60年代から現在までのまなざしを〈街・若者・知〉をキーワードに討論していただく。

